

女専サロン《の》.. 施術名、クリトリス集中ケア♡

扉が閉まる音が、やけに静かに響いた。たったそれだけで、外の世界がすつと遠のいた気がする。空調は控えめに唸っていて、どこか白檀に似た香りが空気の奥に溶けていた。目の前には、間接照明だけが灯っている。深く沈んだ藍色の壁と、光の粒が交わらない、均整のとれた空間。個室マッサージと聞いて想像していたものは、あまりにも違っていた。落ち着きすぎている。整いすぎている。それが逆に、神経を過敏にさせる。施術ベッドには、薄茶のシーツがぴんと張られていて、四隅には同色の大判タオルがぴたりと畳まれていた。足元には、ペールグレーのスリッパが揃えられている。壁に貼られたメニュー表には、「深部リンパケア」や「女性特化コース」などの文字が、曖昧な言葉で控えめに並んでいた。部屋の隅に立っていた男性が、目を合わせ、軽一会釈する。

「はじめまして。担当の相馬です。どうぞ、おかけください」

施術師。その肩書きには収まりきらない印象の男だった。白い施術着の胸元から、黒いヨシャツがわずかに覗いている。左手首には、控えめな光沢のあるゴールドのバングル。動作に無駄がなく、静かで、それでいて妙に目を引いた。優香は、示された椅子に控えめに腰を下ろした。膝を揃えて深く息を吐く。心臓の拍が、さつきより少しだけ早い。そのとき、彼が差し出してきたのは、ラベンダー色をした厚手の紙ファイルだった。表紙には金のロゴが箔押しされていて、「初回ヒアリング用」と書かれている。字体は柔らかく、品のあるものだった。けれど、ページを開いた瞬間、思わずまばたきをした。

《Q3. 最近、オーガズムを感じたのはいつですか？》

《Q4. ご自身の性感帯は、どのあたりだと感じますか？》

《Q5. クリトリスに触れることに、抵抗はありますか？》

《Q8. 触れられてみたい強さにチェックをつけてください》

その文字列だけが、ファイルの空気を変えた。色も、紙質も、字体すら変わっていないのに、意味だけが――皮膚に、じかに触れてくる。目を滑らせていくほどに、書かれている内容が現実味を帯びてきて、呼吸が詰まった。文章は丁寧だ。語尾も整っていて、字体も崩れていない。それなのに――言葉の中身だけが、どんどん肌を

刺してくる。

《弱くなぞるように》

《湿った舌先で》

《ピンポイントで叩かれるように》

選択肢のひとつひとつが、理性を試すように並んでいた。わかっていた。こういうサロンだと知っていて、来た。だけど、これは……想像より、ずっと……足が、すこしだけすくむ。それでも、今さら「やつぱりやめます」と言える空気ではなかった。

「ご記入後、ベルを鳴らしてください。すぐにお迎えに上がります」

背後から響いた声は、落ち着いていて、澄んでいた。微笑みさえ浮かべない、完全な業務口調。だからこそ、怖かった。このサロンでは、こういう質問をすることも、こうした反応も——きつと普通なのだ。優香は、用意された銀色のペンを指先で転がした。細身で、滑らかな重みのある軸が、わずかに手のひらに汗をにじませる。正面の鏡に映る自分の顔が、気づかぬうちに紅潮していた。頬だけでなく、目元もうっすらと潤んでいる。ベルを鳴らした。そのわずか数秒後、相馬がふたたび現れた。無言のまま、手元のファイルを開く。そして、すぐに

視線を落とした。眼差しは変わらない。読み終えるまでの数十秒が、まるで永遠のように長く感じられた。

「ありがとうございます。では、施術の準備に入りましょうか」

声色にも表情にも、何の起伏もなかった。ただ静かに、業務としての次が始まる。手渡されたのは、艶のないグレーの不織布ポーチだった。フアスナーを開けると、中には薄桃色の紙シューズと、肌色のワッフルガウンがきつちりと畳まれて入っていた。角はぴたりと揃い、折り目は真つすぐに。たたみ方すら完璧で、乱れが一切ない。その清潔さが、逆に不安を煽る。これから自分が身にまとうものが、どこに、どう触れられるためのものなのかを考えた瞬間、喉が乾いた。

「こちらの更衣スペースでどうぞ。ハンガーにお召し物をおかけください。下着はシューズだけお召し替えいただければ結構です」

案内されたのは、カーテンで仕切られた狭い半個室だった。壁には、重厚な金属製のハンガーフック。そこに掛けられた木製ハンガーには、小さなロゴの刻印。肩の部分には滑り止めのラバーが施されていて、衣服が落ちぬように配慮されている。コートを掛けたとき、静電気がぱちりと音を立てた。その音が、妙に大きく聞こえて、鼓動が一拍ずれる。足元には白い脱衣カゴ。内張りには、リネンのような柔らかな布が貼られている。ブラ

ウス、スカート、ストッキング——それらをひとつずつそつと沈めていくたび、恥ずかしさが、皮膚から一枚ずつ剥がれていくような錯覚に襲われた。紙ショーツは、ごく薄い。透けるほどではないけれど、どこか頼りない質感。下着というより、施術の都合上必要な目隠し。そうとしか思えない。ガウンはワツフル地の肌色で、羽織ると膝上ぎりぎりの長さだった。前合わせは紐で簡単に結ぶ仕様。胸元の開きは深く、うっかかりかがめば中が覗いてしまいそうだった。鏡の前に立ち、自分の姿を見つめる。いつの間にか、首筋にうつすらと赤みが差している。自分の姿を見て、恥ずかしいと感じるなんていったい、どれくらいぶりだろう。ピンポン。控えめなチャイム音が、施術の始まりを告げた。カーテンを開けると、相馬はすでに待っていた。手袋を外し、両手をぬるま湯に浸している。その脇には、木製のトレイ。そこに並べられた三本の小瓶——施術用のオイルだ。ラベルのない琥珀色の瓶には、スポイト式のガラスキャップ。ひとつは無香料、ひとつは柑橘系、そしてもうひとつは、ほんのりとバニラの甘い香りがした。

「好きな香りをお選びください。リラックス効果のあるものをご用意しています」

整った口調。表情はやはり変わらない。優香は、迷いながらも真ん中の柑橘を選んだ。相馬は一度だけ頷くと、オイルを数滴、掌に垂らした。両手を重ね、ゆっくりと温める。動作は流れるようで、過不足がない。そし

てその掌が、タオル越しに腰骨をなぞった。温かい。けれど、意識はすでにその少し下へと引き寄せられていた。やがて指先が、布越しに鼠蹊部へと降りてくる。ぴたりと止まり、細く、やわらかく滑る。ガウンの裾がわずかに持ち上げられ、紙ショーツの端をなぞるように、指先が動いた。

「……っ」

優香は反射的に息を吞む。太腿の内側。じっとしているのに、そこだけが熱を持つていく。

「——ここ、少し張ってますね」

淡々とした声。それは、ただの業務連絡のように聞こえた。けれど、指の向かう先は——明らかに、そこだった。紙ショーツの中央。生地が重なっている、ごくわずかな盛り上がり。そこを、すくいあげるように、指先が下から押し上げてくる。

「っ……やっ……」

思わず、吐息がこぼれた。押される。撫でられる。細かく、左右に。指の動きは、丁寧で、ゆっくりで、執拗だった。タオルの下で、呼吸が熱を帯びていくのが、自分でもわかる。わかってしまうほど、反応していた。

だって、

「クリトリス、少し浮いてますね。施術しやすい位置です」

言われた瞬間、耳の奥がじん、と熱くなった。施術しやすいって——どういう意味？聞き返す前に、また、指が。今度は、指先の腹で、じつくりと。紙越しに、円を描くように撫でてくる。小さく、小さく。焦らすように。リズムだけが、妙にいやらしかった。

「……っ、あ……や、め……っ」

声が漏れる。やめて——そう言いながら、脚は逃げきれなかった。ショーツの布が、湿ってきているのを、自分でも感じる。いやでも、確かに、わかってしまう。それなのに、指は止まらない。

「刺激が強いようでしたら、加減します。……シートにはやや強めとありましたので」

読まれてる。あるとき。チエツクをつけた、その記憶が、皮膚の奥から蘇ってくる。中くらいじゃ物足りないかも——そんな気の迷いだったはずなのに。指がいったん止まる。と思った、その刹那。ぐっ——と押された。クリのすぐ横。そこを、押し出すように、強く。

「ッ……やっ……だめ、それっ……っ♡」

もう、声が止められない。喉が、勝手に震えた。指は、反応に合わせて力を抜いた。ほんのわずかに——けれ

ど、位置は正確すぎた。狙って、届いて、そこだけを押してくる。

「そこが、好きなんですね」

ささやかれたわけではない。ただの確認のように、淡々と。それでも、羞恥が皮膚を焼いた。返事ができない。そのかわりに、鼻の奥へと、あたたかな柑橘の香りが入り込んできた。さつき自分で選んだ、あのオイルの香りだった。

「次は、直接に触れますね。ご同意いただけますか？」

——今、頷いたら。もう、戻れない。そう分かっていながら、優香は頷くしかなかった。ショーツの端が、音もなく、指先で持ち上げられる。その下から、空気がすっと入り込んできた。ほんのわずかの時間差で——ぬるく温められた指が、そこに、直接、触れてきた。

「……っ」

ショーツがずらされ、肌が露わになる。花びらのようにやわらかな皮膚に、指先がそっと入り込む。空気に撫でられ、つづけて——温かな指が、その中心を、割る。

「……っ、ん……♡」

思わず、腰が浮いた。逃げるでも、迎えるでもない——反射的な動き。指が、直接、そこに触れている。ぬるりと湿ったオイルが、熱を帯びた先端に絡みつく。中指と薬指の腹が、縦に。まるで何かを探すように、数ミリ単位で撫で上げられる。几帳面なリズム。整っているのに、容赦がない。

「……っひ、ん……♡」

背が反る。思わず漏れた声に、♡がついてしまった。そのことに気づいた瞬間、顔が熱くなる。なのに——
「感度、良好ですね」

相馬の声は、淡々としていた。まるでそこがただのリンパ節か何かであるかのように、一切の情緒も興奮もなく、施術だけが遂行されていく。

「……っやつ……ん♡んっ、ふ……う……♡」

また、声が止められない。また、♡がついてしまう。太腿がかすかに震える。腰が、自重に沈み込んでいく。そこへ、指が——細く尖らせた中指の第一関節が、ぬるりと沈む。クリトリスの根元。そこに沿って、じわじわと滑らせてくる。

指の圧が変わった。点ではなく、面。滑るように沈む線の感触が、内部まで押し込んでくる。

「ひうつ……♡あ……っ、そこ……っ♡」

背中がしなる。脚の付け根が跳ね、腹の奥がぎゅっと掴まれる。声が漏れるのを止められない。だけど、相馬の指は、その反応をまるで結果として捉えるように、押しでは、角度を変え、撫でてくる。呼吸が浅くなっっていく。吸っても、満たされない。脚の奥が、ぴくり、ぴくりと痙攣しているのが、自分でもはつきりとわかった。なのに――

「……ここで、一度、圧を抜きます」

その声とともに、指がふっと離れた。

「あっ……やっ……い、いま……ちよつと……っ♡」

抗議のつもりだった。けれど、喉からこぼれた声には、どうしても♡がついてしまう。相馬は、何ひとつ動じなかった。指先についたオイルを布で拭き取ると、すぐに淡々と告げる。

「次は五分間、静的保持に入ります。動かさず、圧のみで刺激を蓄積させていきます」

11 静的保持。意味を理解するより早く、指が戻ってくる。今度は――まっすぐに、真上から。中指の腹が、じわ

りと、体重を乗せるように押し当てられる。動かない。撫でもしない。ただ、押すだけ。一定の圧。正確すぎる位置。まるで、呼吸のリズムすら、そこに合わせるように。

「……っ、ふっ……♡……ん……ん♡……っあっ……♡」

腰がわずかに浮く。でも、指の圧は逃げてくれない。逃げた分だけ追いかけられ、また押し戻される。どこにも逃げられない。触れているのは一点だけ。なのに、そこに、全部の快感が流れ込んでくる。皮膚の奥で、電流のように溜まっていく。

「残り三分です。呼吸は自然に、声は我慢しなくて構いません」

事務的な声が、耳に届く。それだけで、また喉がひくつく。構いませんと言われたその瞬間から、声が止まらなくなる。三分——その三分が、永遠に感じられた。

「アンケートで、圧をかけてほしいにチェックがありましたね」

その言葉が、脳に引っかかる。あるとき、たしかに——撫でるようではなく、押し当てるようにを選んだ。

ほんの気まぐれだった。けれど今、それがどういう意味だったのか、身体が痛いほど理解していた。相馬が、施術台脇の棚を開ける。透明のケースから取り出されたのは、クリーム色のシリコン製器具。

「ホットフィンガーです。内側に発熱素子があり、体温よりやや高め、三十八度前後を一定で維持します」
説明は、まるで医療器具の取り扱いのようだった。器具は指サツクのようなかたち。右手の人差し指と中指に、相馬は迷いなく装着する。

「では、こちらで施術します。圧を持続させながら、深部への誘導を行います」
そのまま、脚を少しだけ開かれる。もう、ショーツは外されていた。布の隔たりは、なにもない。

「……失礼します」

ぬくもりが、そこに触れた。温かい。ただ、温かいだけのはずなのに。触れられた皮膚が、ふくりと息づいた。ほんのわずかに、押されただけ。

「っ……んんっ♡……う……っ、く……♡」

反射だった。腰が、吸い込まれるように動いた。そこは、ぴたりと指に覆われている。直接——クリトリスの真上。皮膚一枚すら挟まない、生の接触。湿ったオイルが、尖った肉の先端に絡みついて、逃がさない。声が、勝手に♡を帯びて零れる。口に出そうとしたわけじゃない。けれど、指がそこにあるかぎり、喉が勝手に甘えてしまう。押し当てられたまま、動かない。ただ、温かく——ゆっくりと沈む圧。熱と重さがじわじわと一点に溜

まっっていく。

「十秒、圧を加えます。五秒休み。これを繰り返しますね」

——そんなテンポで責められるなんて、思っていなかった。でももう、拒否の言葉は浮かんでこない。身体のほうが、先に従ってしまっている。

「……っ♡……あ……ん……♡……う……っ、ん♡」

一押しごとに、脚が震える。反射的に。止められないほどに。クリの奥——自分でも触れられないような場所まで、振動がじんわりと届く。小さく、小刻みに。けれど、確実に壊されていくような感覚。

「はい、もう一サイクルいきます」

告げられた直後。次の十秒は、ほんのわずかに角度が変えられていた。今度は、真上からではなく——斜め後ろから、押し上げるように指が当てられる。

「つつ♡……や……あっ、んっ……んう♡……だ……め、っ♡」

声も、顔も、腰も。すべてがその刺激に引きずられていく。逃げたいのに、逃げられない。脚がもつれ、腹が跳ね、行きそうなのに——そのとき、

「……少し、圧を抜きます。呼吸を整えてください」

ぬる、と指が離れた。その一瞬。体内に残った快感の尾が、子宮の奥をしずかに揺らした。

「クリ周辺、過敏になっていますね。……次は、点ではなく面で触れます」

説明は変わらず事務的だった。なのに、言葉だけで脚がわずかに開いてしまう。その直後——人差し指と中指の腹全体が、ぴたりと重なる。擦らない。動かさない。ただ、温かい面が、そつと押し当てられた。皮膚の熱が、さらに引き出されていく。外気との境目が溶け、刺激だけが内部へと吸い込まれていく。

「……っ♡♡っ♡……やつ……ああ……っ♡……く……る……っ……♡」

言葉が、もはや形にならなかった。息が引つかかる。喉が痺れる。のぼる。のぼる。もう、てっぺんが見えていた。けれど——それでも、まだ行かせてもらえない。♡ばかりの声が、施術室に零れていく。けれど、彼は何ひとつ反応しない。まるで何事もなかったかのように、ただ淡々と、タイマーを確認し、指の角度をほんの数ミリだけ修正した。

「……あと二分。このまま、保持します」

15 ———それが、どれほど長い二分になるのか。優香には、まだ想像すらできなかった。

「……はい、いったん圧を外しますね」

そう告げられた次の瞬間、指がふっと離れた。押し込まれていた一点に、ひやりと空気が触れる。ただ、それすらも、くすぐったかった。温もりの残り香が、じんわりと粘膜の奥にまでしみている。圧の記憶だけが、まだそこに残っていた。

「反応、良好です。かなりほぐれてきましたね」

たしかに——そうだった。息は浅い。太腿の内側は、もう力が入らない。腰が、じぶんの意思と関係なく沈み込んでいく。けれど——いつていないという確かな実感だけが、焦燥のように身体はどこかにこびりついている。

「クリの周囲、これで十分に柔らかくなりました。今後の刺激への順応性が高まります」

事務的に、静かに告げられる。けれど、その内容だけが、あまりにも淫靡だった。指の施術は止まっているはずなのに、身体はまだ熱を持っていた。喉は渴いているのに、唾が飲み込めない。心臓だけが、やたら早い。なにもされていないのに。それでも、まだ濡れていた。

「次は、鼠蹊部と下腹部を軽くほぐしていきます。直接は触れませんが、間接的な圧がかかります」

16 そう言いながら、相馬の指が、タオルの上から置かれた。ほんのわずか——指が沈んだだけ。それだけのはず

なのに、

「……や……んっ♡あ……まだ……っ♡」

腰が跳ねた。びくんと、小さく。でも確かに。さっきまでそこを押されていた名残が、どこまでも、皮膚の奥に残っている。身体が、もう普通の施術に耐えられなくなっていた。ただのマッサージのはずなのに——脚の奥が、ひくっ、ひくっ、わずかに脈打っている。何もされていないのに、反応が止まらない。

「かなり高反応ですね。……我慢、されてますか？」

穏やかな声で問われて、言葉に詰まった。してる。ずっと、してる。でも、言えない。口に出したら、きつとそこで何かが決壊してしまう。我慢してると認めた瞬間に、自分で自分を崩してしまいそうで。

「そのまま……耐えてくださいね」

優しい声だった。なのに、それは寸止めを知っている者の言葉だった。行かせない前提で進む施術。優しささえ、快感を持続させるための圧力に変わっていた。そして——クリのすぐ下。恥丘の縁を、指の腹が斜めに撫でていく。

「っ♡♡っ……ん、だめっ……だめなのに……っ♡」

いけない。もういけないのに。そのあとの身体だけが、静かに準備されていく。反応が止まらない。緩められたと思ったのに、また次が来ると、身体のどこかがもう知っていた。

「――次、参りますね」

その声が落ちた瞬間、優香の腰が、勝手に浮き上がった。意図したわけじゃない。でも確かに、施術されるのを待つ体勢で、ベッドへ沈み込んでいった。タオルが、音もなく貼りつく。シーツの上に残ったわずかな皺が、彼女の震えに引き攣れる。

「……反射ですね。正常な反応です」

その様子を見ても、相馬の声は変わらない。美容師が髪を分けるように、当然の手順として、淡々と進行していく。すでに、彼の指先は新しいオイルを受けていた。しつとりと、指の腹全体に馴染ませながら。

「今から、外陰部下部のリンパにかけて、微圧をかけていきます。……先ほどよりも広範囲になりますので、反応には個人差があります」

言葉が終わると、指が触れるのは、ほとんど同時だった。今度は、真上ではない。クリのほんの下、骨盤のくぼみをなぞるように――親指が左右対称に添えられる。

「圧、かけます」

ぴたり。押される。反応する。声が、喉の奥までのぼってくる。まだ——終わっていない。ぬるりと沈んでいく。左右から、クリの周囲が押し込まれる。皮膚の奥が引き寄せられ、やがて——そこそのものに、ぐっと圧が集中する。

「ッ♡……あ……ん……♡……あ……んんうつ♡」

また、腰が浮いた。反射だった。それでも、指の圧を押し返すように——震えながら、追いかけてしまう。

「施術部位がずれないように、腰は安静にお願いしますね」

柔らかな注意だった。まるで美容師がロッドを巻くときに言うような、当たり前の仕事としての一言。なのに。今の優香には、それが一番こたえた。動かしたくて仕方がない。けれど、動かしてしまえば、この施術が——止められてしまう。

「……っ♡ご、ごめんなさ……♡」

謝るつもりなんてなかった。けれど、声が勝手に出た。腰はまだ、わずかに震えている。クリは、熱を持ったまま疼いている。ずっと、ずっと、そこに何かを求めている。それでも、相馬の声色は変わらなかった。

「大丈夫ですよ。施術の範囲内です。では、次に移りますね」

そう言つて――ぴたりと、クリの左右を押さえていた指先が、ほんのわずか、縦に動いた。押して、擦つて、また押す。刺激の方向が変わっただけで、頭の奥まで感覚が突き上げてくる。もう、ダメ。行かせてほしいなんて、言えるわけがない。でも、腰だけが勝手に、お願いと叫んでいる。

「反応が非常に明確ですね。……では、部位を変えます」

静かな声。施術の区切りを告げる、ただの段取り。彼の指が、一度だけ離れる。けれどその直後、中指の腹が、クリトリスのすぐ横を、なぞつた。帽子状の皮膚の縁。もっとも感じやすい、あの部分。ピンポイントで。

「つつ♡♡っ……ああ……っ♡♡」

脚が跳ねた。許可も合図もなく、反射で。腰も、喉も、言うことをきかない。お願いすら通らない体が、勝手に求めてしまう。

「この周辺、敏感ですね。左右で感度差があります。……右側のほうが反応が強いです。以降、調整します」
まるで報告書の読み上げのようだった。羞恥でどうにかかなりそうなのに――彼の指は、また次の適切な角度を
探しに来る。まるで技術カルテを読み上げるような声だった。説明と同時に、相馬の指が右側だけ角度を変え、

軽くプッシュする。次に——根元をなぞる。先端を、軽く弾く。そのまま上を、ぬるりと滑らせる。

「う♡っ……や、ああ♡♡……っん、ひっ、い……♡♡♡」

もう、声が止まらない。舌を嚙んでも、喉が勝手に泣き出してしまふ。音になる前に、声が♡をまといつて零れていく。

「はい、反応ピークですね。……ここから、深部を使つて整えます」

整える。そんな穏やかな言葉じゃない。これは、完全に、壊されるための助走だ。指先が、一度だけ強く押された。クリが、わずかに引っ込む。そして、離れる瞬間——ふるりと、跳ね返る。そこを、正確に捕まえた。押して、離して、また押して、そして——滑らせる。

「この動き、覚えておいてください。ご自身で再現できると、セルフケアにも活かせます」

そんな話、今じゃなくていい。今はもう、身体を保っているだけで精一杯なのに。それでも、そのセルフでもここまでできるんですかと叫びたくなるほどの指の動きが、止まらない。

「もう少しですね」

21 そのもう少しが——まるで、行かせてくれないときの予告のように聞こえた。身体は、叫びたがっている。も

う、許してほしい。もう、終わらせてほしい。けれど、彼の指は、まるでまだ今じゃないとでも言うように、ク
リの斜め下に、わずかに位置をずらす。そして、また押す。

「あ……っ♡♡……そこじゃ……ないのに……♡……なんで……っ♡」

違う。でも、気持ちいい。なのに、届かない。だからこそ、行きたくてたまらない。

「大丈夫。……ちゃんと、そこに、連れていきますから」

優しかった。でも、それ以上に、主導権を離さない声だった。指先と同じように、声までもが支配してくる。
ここからが、最高の絶頂に向かう導線だと、そう言われていた。

「……そろそろ、誘導しますね」

その声は、いつもと変わらなかった。静かで、整っていて、どこまでも淡々としていた。けれど、それは、
はつきりとした宣告だった。これから、いかされる。指が戻ってくる。今度こそ、真正面から。クリトリスの――
その核に。角度が違う。速度が違う。温度すら、これまでと違っていた。

「ん、ひゃ……っ♡♡♡あっ、だ、だめっ♡♡♡あああ……っ♡♡♡」

腰が跳ねる。タオルがぐしゃりと振れる。ベッドの上で、脚が痙攣する。何度も。何度も、同じ場所だけが責

められる。逃げようとしても、すぐに追いつかれる。止めようとしても、その動きのほうが速い。

「クリの中心、かなり反応しています。……そのまま、我慢しないで」

その言葉が、最後の引き金だった。言葉が――許可になった。

「や……っ、いっちゃ……っ♡♡♡いくっ、いくっ♡♡♡っあ……ああああっ♡♡♡♡♡」

――世界が、白く弾けた。脳の奥が、ひゅう、と痺れた。意識が浮かび、沈む。背骨が軋むように痙攣して、脚の付け根が、びくん、びくんと跳ねる。指は、わずかに圧を残したまま止まっていた。それだけで、快感の残響が、波のように、内側から押し寄せてくる。

「……はい、きちんと抜けましたね。いい反応です」

事務的な評価。無機質な確認。なのに、それが今は、どうしようもなく嬉しかった。

「あ……あっ……♡……ごめ、なさ……♡……っふ、う……」

言葉にならなかった。喉の奥でくずれ、声が濡れる。目の端から、涙がひとすじ。止まらなかった。全身が、びくびくと痙攣している。タオルのぬくもりが、ゆっくりと、その身体を包み込んでいく。

23 「この後、クールダウンに入ります。少しだけ、タオルで温度を戻しますね」

整った口調で、静かに告げられる。今、行かされたばかりだというのに、その声にまた、肌が微かに反応してしまう。彼の指が、そつと、そこから離れた。けれど——皮膚が、まだ触れられていると錯覚していた。熱も、重みも、残っていた。今も、ほんのわずかに——疼いている。外だけで、ここまで。なにも挿れられていないのに。なにも命令されていないのに。……こんなに、いかされてしまうなんて。絶頂のあと。タオルがふわりと掛け直される。それだけで、なぜか安心した。けれど、身体はまだ震えていた。指が離れても、熱は抜けない。肩に触れられただけで、びくんと跳ねた。もう、さっきまでの優香ではなかった。

「このあとは、通常の下腹部から鼠蹊部のリンパマッサージになります。ゆっくり呼吸して、力を抜いてくださいね」

淡々と告げられる。その言葉に、少しだけ肩の力が抜けた。もう、あんなふうには責められないんだ。そう、思った。そのはずだったのに。タオルの上から、指が腰骨の脇をなぞった瞬間——

「あ……っ♡……ん……っ♡」

また、声が漏れた。無意識に、喉が甘えを吐いた。今度の刺激は、強くなかった。やわらかくて、あたたかくて、優しくて。だからこそ、感じてしまった。余韻が、抜けてくれない。身体が、まだずっとあの状態のままだ。

「血流が上がっているので、少し触れるだけでも反応が出やすい状態です。問題ありません」

そう説明される。けれど、その声すら、どこか身体に触れているように感じる。指は静かに、緩やかに、脚の付け根を通り、下腹部を滑り、円を描くように、やわらかく撫でていく。内腿。腰の裏。脇腹。どこも、ただ撫でられているだけ。だけど――どこも、とろけてしまう。

「はぁ……♡……なんか……すご、い……♡」

言葉が、口からこぼれ落ちた。自分のものとは思えないくらい、とろけた声だった。まだ、息が浅い。まだ、心臓が早い。いかされたのに。もう終わったはずなのに。なのに、身体は、まだ続きを望んでいる。気の抜けた声が、思わず漏れた。脳が、まだ熱を持っていた。火照りきったまま、冷めきらない。まぶたが重く、脚にも力が入らない。

「……はい。お疲れさまでした。施術はこれで終了となります」

そう言いながら、相馬は最後のタオルを、そっと脚にかけた。ふんわりと、毛布のように。肩に掛けられたそのぬくもりが、優香の全身をやわらかく包んでいく。

25 「起き上がれるようでしたら、ゆっくりお着替えください。お茶をご用意して、お待ちしております」

部屋に、静けさが戻った。けれど——身体の内側は、まだ波が消えないまま、ゆるやかに揺れていた。行つたあとも、こんなに気持ちいいなんて。むしろ、いかされたあとのほうが——一番とろけていた気がする。着替えを済ませ、部屋を出る。廊下には、ほのかな灯りが灯っていた。壁沿いの間接照明が、やさしい陰影を作っている。足音も、吸い込まれるように静かだった。出迎えた女性スタッフが、小さく会釈する。案内されたのは、ラウンジのような控室だった。静かなピアノのBGM。低く設えられたカウンター。その奥には、薄桃色の茶器が整然と並んでいた。

「お疲れさまでした。どうぞ、ゆっくりなさってくださいね」

そう声をかけられても——うまく返事ができなかった。心地よさと、気まずさと、まだどこかふわふわとした頭とで、言葉がうまく喉を通らなかった。案内された席に腰を下ろすと、温かい白梅茶が運ばれてくる。白磁のカップ。掌に、ぴたりと収まる感触。両手でそっと包み込むと、ふう、と小さな息が漏れた。

（……いったんだ、あそこで）

誰にも言えない。でも、確かに。自分のなかだけにある秘密。指しか、触れていない。いや——指だからこそ、だった。あの人の、クリトリスだけを知り尽くした指。その動きだけで、私は、完全にいかされていた。

「ちなみに、次回以降は深層性感リズムコースもご用意できます」

目の前の女性スタッフが、やわらかく微笑む。白衣の胸には、小さな名札。丁寧で、整った口調は、どこまでも美容サロンのそれだった。

「こちらは、持続的な刺激を中心に、反応波形をモニタリングしながら、より長い快感の波を形成していくコースです」

なにそれ——でも、知りたい。感じてみたい。あの絶頂よりも、もつと。もつと高くまで、連れていつてもらえるなら——

「ご希望があれば、ノータッチ追い込み法なども体験いただけます」

その言葉の意味が、一瞬わからなかった。けれどすぐに、顔が熱くなる。(……触れられないまま、いかされる……?)

「初回であそこまで反応が出る方は、次で持続責めに入ると、かなり良い抜けが得られると思います」

——抜け。いったあと、身体の奥が軽くなって、何もかもがふわふわと浮かぶ、あの感じ。もう一度、じやない。あれ以上。もつと深く、もつと高く——

「では、仮で二週間後の同じお時間、【深層性感リズムコース】をお取りしておきますね」

気がつけば、頷いていた。掌の中の白磁のカップからは、まだ微かに湯気が立っていた。白梅茶の香りが、ゆつくりと、脳を包んでいた。白梅茶を飲み干したとき、ようやく気づいた。指先が、まだ、熱を持っている。たった一度、触れられただけなのに。それだけで、私は——こんなにも。

「また、お待ちしておりますね」

スタッフの穏やかな声に見送られて、自動ドアを出た。

夕暮れの風が、頬をやさしく撫でていく。ほんのりと冷たいはずのその風が、なぜか——あの指の、ぬくもりを思い出させた。次は、もっと深くまで。いける気がした。